

# 命を思う

山 本 圭 子

人間を含む生物の体を構成する最も小さな単位は細胞というまとまりですが、これをさらに小さい単位に分けることができ、それが「分子」という単位です。このような分子から出来ているという点では、生物も、無生物である金属片や布切れも、同じです。

これらの分子は、生物のものであっても無生物のものであっても、共通する物理的・化学的法則に従うのですが、当然、違っている点もあります。

最も重要な違いは、生物の分子はそれぞれ特定の役割を持っており、さらに互いの役割を「知って」おり、別のところから出された命令によって仕事を分担するという相互関係を保ちながら、全体として一つの大きな仕事をしているという点です。何万という数の分子が、それぞれ別個の役割を持ち、「社会」を構成している様子は、人間の社会や生態系によく似ています。

体の中で無数の、それ自体は意思をもたないはずの分子が、日々働き続けていることを、私たちの脳が直接に感じることはありません。現代は、圧倒的に視覚優位の時代です。眠ることも休むこともせず働き続ける細胞や組織に思いを馳せることは、直接見ることができないだけに、あえてしようと思わないでしょう。しかし、生物としての私たちは、無数の細胞が、その多様な働きによって、自らの生命を支えていることを、どこかで知っているように思えます。

命をたいせつにする、とはどういうことでしょうか。自分の命をたいせつにしていますか、どのようにたいせつにしていますか、と尋ねられたら、何と答えるでしょうか。健康を維持するために食事に注意し、適度な運動を...という答えが多いかもしれません。しかし、何が健康に良いかさえ、ほとんど当てになる情報はありません。赤ワインに含まれるポリフェノールの一種が体によいという実験結果\*が発表されたとたん、居酒屋でも赤ワインをオーダーする人が増えたそうですが、全ての個体に同じ効果があるのかは大いに疑問です。また、本当に良い効果だけなのか、体の中で何か悪さをしはしないか、ということも全く知られていません。では何をしても確かな効果は期待できない、何もしないでよいのか、というと、もちろんそんなことはありません。

現代人は、大脳新皮質を働かせ過ぎて、生物としての直感が弱っていると言われることがあります。「免疫系」、「細胞の寿命」、「生殖・発生・分化」などのキーワードをインターネットで検索し、軽く勉強したあと、ソファーに横になって、体の中で今も休まず行われている様々な働きに感謝する時間を持つてみることをおすすめします。生きものとしての本来の感性を取り戻す時間。なるべく脳には静かにしててもらえるよう、リラックス系のお香でも焚きながら。自分だけに聞こえる体の音を聞こうとして。自分が制御できない、見えない「自己」を思うとき、自ずと、何をすればよいのか、何をしてはいけないのかが見えてくると思います。

「生きているものは、少なくとも知っている。

自分はやがて死ぬ、ということを」(旧約聖書 コヘレトの言葉 9:5)

\* Nature 2003年9月号。ポリフェノールの一種であるレスベラトロールの働きにより、ヒトの培養細胞ではX線照射後の細胞生存率が高められることを示した。

(文学部助教授)